

勘米良亀齡先生のご逝去を悼む

西 弘嗣・酒井治孝



平成21年4月6日、勘米良亀齡先生は肺炎のためご逝去されました。享年85歳でした。今年1月末から体調を崩しておられたことは伺っておりましたが、快方に向かっているとのことで、安心しておりました。したがって、この急報は全く寝耳に水で信じられませんでした。門下生の一人として深く哀悼の意を表すると同時に、敬愛した先生の御遺徳を偲び、この追悼文を捧げる次第です。

先生は大正12年11月1日に熊本県湯前で誕生し、人吉中学を卒業後、熊本県立高等工業高校で学んだ後、昭和18年10月九州帝国大学理学部地質学科に入学されました。当時は戦争中のため、資源調査要員として新潟・長野県境の富倉へ学徒動員され、石油資源の調査を行ったそうです。その際フィールドで、雪解け水の流れる川を渡河せずに調査していたところ、木下浩二先輩（元東海大学教授）から「安易な調査をするな！」と叱咤されたことが、地質学者人生の最初の重要なイベントとなったそうです。その後井尻正二班長の下、食糧不足で草粥をすすりながら調査を行い、無事調査を完了されました。これが第二のイベントになりました。新潟での調査終了後、指導教官であった故松本達郎先生と帰学途中の京都駅で終戦を迎えたそうです。終戦後は、福岡にも進駐軍が来るので、秘密の貴重な調査資料を処分したと聞いています。

戦後の混乱期は食糧もなく生活が大変だったので、郷里に近い熊本県球磨川中流域の神瀬地域の中・古生界の研究を卒業論文として行い、16×12kmの広大な範囲の地質図を作成しました。その調査の基礎データとなったのは、我々門下生が「勘米良マップ」とよぶ五千分の一のルート

マップで、急峻な山岳地帯であったにも拘らず、ほとんどすべての沢で作成されています。その詳細な野外調査の結果、古生代と中生代の異なる地質系統の地層が急傾斜で交互に分布する地質構造が明らかになり、この構造を「サンドイッチ構造」と名づけました。これが第三のイベントであり、先生の研究の出発点となると同時に、その後の研究のスタイルを決めたそうです。

昭和21年9月同学科を卒業後、同年10月に九州帝国大学理学部助手として採用となりました。先生は球磨川下流域を中心に調査を進め、中生界の層序とともに、火成岩・変成岩とそれに付随する古生層の関係を研究しました。現在の黒瀬川構造帯に相当する地帯です。さらに調査範囲を広げ、古生界の矢山岳の石灰岩体を調べ、紡錘虫の化石帯区分を提唱し、これにより日本地質学会研究奨励賞を受賞し、古生界の研究者としての地位を確立されました。これが、先生の第四番目のイベントです。特に、紡錘虫に関する研究では、格段に精度の高い地質調査に基づき、紡錘虫化石群の分類・記載を行い、それらの垂直分布・共存関係を明らかにして、中～上部石炭系・下部二畳系の生存化石帯を確立し、東アジアの標準生層序となった栗木統・氷川統を設定しました。また、南部北上の下部二畳系坂本沢統の層序・紡錘虫についての知識を全面的に改訂し、上部二畳系の紡錘虫生層序を確立して球磨統・三田井統を設定するなど、日本の上部石炭系～二畳系の層序・地史の研究において常に先導的役割を果たされました。

当時の紡錘虫の薄片作りは大変で、金ノコで切断し、1試料を処理するのに10日もかかり、研究時間のほとんどすべてを薄片作りに費やしていたと伺っています。このように1950年代から60年代初めにかけては、「西南日本の上部古生界の研究」でリーダーシップをとりながら、矢山岳石灰岩、球磨層、柿迫層、小崎層などの層序を確立すると同時に紡錘虫・サンゴ化石を記載し、「古生界の勘米良」の名前は、「中生界の松本」とならび日本全国に轟いていたと聞いています。まさに、「九州大学地質学教室の黄金期」といってもいい時期でした。また、先生は長年にわたり古生物学会評議委員や古生物学会特別号編集委員長を歴任し、古生物学会の発展にも尽くされました。

大きな転機は1960年代の後半に起こりました。先生は中・古生界の火山性堆積物とチャートの層序・時代・形成環境を総括した論文を書かれました。我々からすれば、今読んでみてもこの論文は優れた論文だと思いますが、そういう整理をすればするほど地向斜の概念に対する疑問が湧いてきたそうです。先生は大学3年生のときに熊本県から宮崎県まで4日間かけて四十万帯を横断したそうです。そのときは「砂岩・頁岩ばかりで何かがおかしいと感じた」と常々我々に話されていました。このときの疑問が、「地向斜の概念」から「プレートテクトニクス」への転換を促しました。先生の格言（我々は“勘米良語録”と呼んでいます）の一つに、「今解決できない疑問は大事にとっておきなさい。既存の仮説で説明してしまっはいけません。

そうすれば、きっとその疑問が後に解決できる時期がきます」という言があります。これはまさにこの時の先生の状況を表していると思います。

その後、先生は“ぶっつり”と古生界の研究を中断し、四万十帯の研究に没頭することになります。古生物学会では「勘米良は紡錘虫の研究はやめたのか」と話題になっていたそうです。先生は造山帯の形成場に関して、「四万十帯のような地層と現在の海洋や大陸で起こっている事象の対応をつけなければならない」と考え、宮崎県の五ヶ瀬川・耳川地域の研究に集中され、得られた地質構造と海洋地質学の最新のデータを比較検討されました。いわゆる斉一観に立った現場（フィールド）第一主義です。そのモデルは、1975年にGDP（地球ダイナミクス計画）連絡誌に提出されました。これが日本で最初の「付加体モデル」です。次いで1976年に、「過去と現在の地向斜堆積物の対応IおよびII」と題する論文を岩波の科学（1976、46巻、5・6月号）に発表しました。これらに対する風当たりは強く、当時の地学団体研究会の重鎮や東京大学の木村敏雄先生なども強く反対されました。この経過に関しては、近年、出版された「プレートテクトニクの拒絶と受容」（泊次郎著、東京大学出版会、2008年）をご覧ください。唯一、東京大学地震研究所の松田時彦先生と当時米国留学から帰国され、高知大に着任されたばかりの平朝彦先生のみが賛同者であったと聞いています。この四面楚歌の状態で、我々門下生一同は、先生と共に四万十帯の調査・研究をやり、議論をしたことを生涯忘れられません。その後、先生のホームフィールドでもあった中・古生界でも松田哲夫・磯崎行雄両氏によりコノドントを使って付加体に類似した構造が最初に報告されました。さらに、中古世幸次郎先生による四万十帯からの放散虫化石の単体抽出の研究を契機に、続々と放散虫を使った研究の成果が発表され、従来は古生界であった地層がすべて中生界に塗り替えられ、そのほとんどが付加体の概念で説明できることが明らかになりました。先生の「付加体モデル」は、日本列島の地質学の常識を根底から覆してしまいました。これが先生の地質学者人生の第五のイベントです。

先生のもう一つの重要な貢献は、「オリストストロー

ム」のような巨大な海底地滑り体が存在する事実とその意義を深く認識し、日本の地質学会に普及・定着させたことです。オリストストロームに関する最初の論文は、プレート論に反対していた地学団体研究会の30周年記念集会で講演され、その特集号に掲載されました。最初は、お膝元の九州大学の中でも散々に批判されたそうです。しかし、フィールド調査に基づいた詳細なデータから導き出されたアイデアであることから、先生の学問的な信念は揺るぎませんでした。その後、四万十帯南帯の「岬オリストストローム帯」をはじめとして日本各地からオリストストロームが報告され、現在では広く一般化しているのは周知のとおりです。また、秋吉石灰岩を中心とする研究を進め、それらが「衝突・崩壊しオリストストロームとして再堆積した後、付加した海山」であることを最初に主張されました。この石灰岩体の形成プロセスに関する考え方も、先生の論文が発表されるや日本国中に広がり、現在では常識と化しています。これらの業績により、平成4年4月に地質学会論文賞を受賞されました。秋吉台の研究の多くは、共同研究者と伴にやられた停年後の研究も含んでおり、“生涯一研究者”としての先生の生き様を表しています。

このように、先生は昭和62年3月に停年退職されるまで、九州大学地質学教室で地質学・層序学の発展とその教育・普及活動に尽力されました。その後、少し体調を崩されましたが、我々門下生一同は先生の自宅にまで押しかけ、「現在こんな面白い研究が進行中です」と報告し、先生と議論するのを楽しみにしていました。

私達は先生の名言から多くの事を学ばせて頂きました。例えば、「データは野外にあり、研究室にあるのではない」、「わからない疑問は持ち続けなくてはいけない」、「つまらない論文（独創性のない論文）はいくら書いてもトイレトペーパーにもならない」など。その中でもとりわけ“自然科学者は常に自然と向き合っている”という、当たり前ですが重要な姿勢を学ばせていただいたことが、先生と人生の一部を共有した我々の幸せだったと思います。これからも一人一人が先生の教えを実践し、若い研究者たちに確実に伝えていきます。